倍版の大册である。學士の蒐集整理せる宋代茶法資料は宋會要、續資治通鑑長編、建炎以來繫年要錄、宋史をはじめ宋代のありとあらゆる重要文獻を網羅し、さらに必要の際には元・明・清のそれにも及んで餘す所なく、之を項目別に分類、同種同類の資料は之を一纒めにし、その項目を年代順に配列し、加ふるに詳細なる內容目次を邦文で要約して卷頭に掲げた。この目次だけで優に三百頁を突破してをり、如何に本書がすぐれた史料集であるかが窺はれるのである。同種の資料の中、宋會要が最も重視され、之を劈頭に配置して、之に相應せる他書より抽出せる資料は、その史料價値の輕重に從つて順次排次すると言ふ形式が採られてゐる。また原文に於て誤りと見做される箇處、疑問視すべき箇處、又は文字の脫落ありと考へられる箇處は夫々、著者が括弧、又は疑問符を添加挿入して、解決を今後の研究に俟たうと言ふ。聞くところに依れば編者は最初訓點のみならず語句の註解をも附する計畫であつたらしくそれが實現の果さざりしを學士は大いに殘念がつてゐられるが、我々としてはこのまゝで充分結構であることと思ひ史料集としてこれ以上を求めることは餘りにも無理であり虫のいい註文でほないかと思ふ。すなはち目次を見て內容を察知出來るから、これだけで大へん便利であり、これが非常に貴重である。編者の苦心は察するに餘りがある。資料の解讀に當つて宮崎市定助教授の御指導を得るべく何十回となく足を運んだ同學士のある日の述懷に曰く「讀むことだけで精魂を盡した」と。實際集めることは同時に讀むことであり、宋會要の難解難讀の程度は少しく宋代研究を志す程の人達であればよく承知してゐるであらう。本書を單に宋代茶法の研究史料としてのみ利用するならばそれは利用するものゝ手落ちである。例へば地理の史料をも包含されてゐるし、また先きにものべた如く利用の仕方如何によつては宋代の社會・經濟の廣き領域に迄進みうるのである。

卷頭に恩師羽田亨博士の序文あり。その中に學士の勤勉と功績とを賞讃されてゐるが、實際私は本書が佐伯富學士の人格そのものゝ現れと言ふ樣な氣がしてならない。（昭和十六年十月東方文化研究所刊　定價拾八圓）（荒木敏一）

## 支那美術史

### 「支那地理歷史大系」第九編

わが國の美術史については、最近漸く著書も多く普及されつゝあることは慶ばしいが、支那美術については、未だ研究も少數の人々に限られ、甚だ淋しい狀態にある。しかし今後東洋が新になる爲には、當然東洋文化の一大精華とも稱すべき支那美術史の中に深く省みられる所がなくてはならない。本書は支那美術を

一、支那繪畫史　望月信成
二、支那彫刻史　水野清一
三、支那工藝史　長廣敏雄
四、支那建築史　村田治郎

の四部に分ち、而も此等を一册の書中に收めて一貫した基調の上

に立ち、歴史的な立場から作品の根柢にある精神を究明し、各々の様式に従つてその變遷を説いてゐることは、「本邦に未だ類書をみない著述」として推賞される。

一　著者望月氏は多年大阪美術館にありて多く眞蹟を見る機會をもたれ、本書には各時代及び作者の傳記を明かにして、懇切丁寧な説明が加へられてゐる。著者の主眼はむしろ後半の文人畫の勃興にあるらしく、文官、在野の士或は禪僧等にして自由に詩境を筆端にほとばしらすもの、東洋獨自の境地として深く讀者を魅するものがある。しかし全般的に列傳風の感じ強く、殊に支那繪畫の起原を論ずる所いさゝか文獻批判に物足りないものがある。

二　水野氏の言に從へば、支那彫刻の隆盛期は南北朝より隋唐の間にあり、これを讀みて雲岡曇曜五窟の石佛の條に至りては、幾度か荒野を横ぎり、この石窟の調査に身をもつて當つてゐる著者の言は、讀者に強い印象を投げつける。この石佛の赤裸々な表現の根柢にはつよい人間性に對する自覺があり、それはこの時代とこの民族とをはづしては理解出來ないものであるといひ、更に雲岡の巨大なマッスは龍門に及んで傳統的線の藝術となり、齊周においては再び解放され發展し、隋代に至りて一種の莊嚴さを加へ、唐に入り成熟して自由に且つ偉大なるまるみをおびてくるとなす。氏の叙述は歴史的精神と密接に結びついてゐる。

三　長廣氏の支那工藝史にありては、先づ古代の銅器が問題とされ、その驚歎すべき鑄造法の優秀性の中には、技術と別に、深く天を畏れる抽象的超越的な精神が傳統的に引きつがれゆくとなす。然しこゝにいふ抽象性なるものが、精神の事實としては如何なるものを内容とするか、一面において具體的なるものを強く有つてゐる支那人が、何故古代においてかゝる抽象性を發揮したるかは更に深く考究さるべき問題であらう。周の工藝を禮器なりとし、それが戰國式多樣性に移りゆく過程を社會的觀點より考察し、帶鉤のもつ意義を古代の服飾上より説明し、唐鏡に對しては鋭い美學的な鑑賞を試みる等、著者の考察は極めて多方面的であり興味深い筆である。

四　吾々は歴史の上で秦の咸陽宮殿や漢の未央宮が如何に莊麗なものであつたかを知つてゐる。然しそれは文獻上のことであつて文獻にのみ頼る結果は勢ひ抽象的觀念的なものに陷り易い。村田博士は今日僅かに遺れる古建築を丹念に調査せられ、各時代の玉宮、宗廟、城郭都市、孔子廟、石窟、佛教・道教・回教建築、祠廟、長城等に亙り、建築學の實際の上から、文獻を批判對照しつゝ吾々に具體的な歴史を示された。たゞ今日吾々に最も親しい北京の紫禁城や熱河、萬壽山の離宮などについて、も少し詳しい説明が欲しかつたと思ふ。（昭和十六年八月、白揚社發行、定價參圓）〔村上嘉實〕

## 安南通史

岩村成允著

從來安南史の研究は專らフランス東洋學者の手に委ねられ、わ